

---

# 夢創作

マッスー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢創作

### 【Nコード】

N0981A

### 【作者名】

マッスー

### 【あらすじ】

少年はどこか疲れ切った様子であった。少年の名前は佐野一樹、名門高校に通う17歳だ。一樹は学校から帰ると勉強づけの日々を送っていた。「なんかつまらないなあ…」一樹はベットの上に寝転び、いつの間にか寝てしまっていた。一樹は夢を見た。そこで夢の中を支配する夢界王<sup>むかいおう</sup>そして夢界王の力で一樹は自分で夢を作り経験する事に。しかし夢の中は一樹以外誰もいなく、学校やらで好き放題する。だが孤独さに耐えられなくなった一樹は家へ帰って行った。そして家に着き部屋のベットに寝転がる。そこで、再び夢界王が現

れる。そして一樹は静かに目を閉じた。

## （前書き）

夢とはなにか……。今からあなたを、奇想天外な夢の世界へ招待いたします。

夕暮れ時、外は2月と真冬で、冷たい風は頬に痛みを感じるほど、ひんやりと冷たかった。

少年は綺麗なオレンジの日が沈む様を、家の2階の窓からぼんやりと眺めていた。

「はあ…」

少年はどこか疲れ切った様子で、深くため息をついた。

少年の名前は佐野一樹、都内の名門高校に通う高校2年生の17歳だ。

学校では成績優秀の優等生で、学年で1位を取るほどだ。

学校では部活はやってなく、家に帰ると部屋の机で勉強づけの日々を送っていた。

しかし最近は、この刺激のない生活に、何か物足りなさを感じていた。

「なんかつまんないなあ…」

一樹はそうぼやくと、動かしていた手を止め、部屋のベッドの上に寝転ぶと、大の字になり、いつの間にか寝てしまっていた。

一樹は夢を見た…

真つ暗闇の中に、自分が独りポツリと立っている。

「今日の客人だな」

暗闇の中にど太い声むかいおっが響き渡る。一樹は辺りを見渡す…

「おれの名前は夢界王夢むかいおうの世界の王で、人の夢を支配する者だ」

「人の夢を支配する？」

「そうだ。おれの仕事は人の夢を監視する事、あと人に夢を作らせる事だ」

「人に夢を作らせる？」「ああ、人に自分で考えた思い通りの夢を作らせる、それをおれが鑑賞するんだ。まあ、それは遊びのようなものだがな。そして今回はお前にそれを買ってもらおう」

「それは、絶対にやらなきゃいけないのかな？」

「いや、断つてもいいが、別に夢の中なら断る必要は無いだろ？ 違うか？」

「そうだな、じゃあやるよ」

「よし、じゃあ始めるぞ。やり方は簡単、ただ想像するだけだ」

「わかった…」

一樹は目をつぶり、頭の中で想像を膨らませた… 自分が今望む世界：

時計に目をやると、朝の7時50分を指していた。

一樹は布団から飛び上がると、急いで制服に着替え、1階へと階段を駆け降りた。

1階のリビングは気持ち悪いほど、シーンとしていた。

朝はいつも母親が朝食を作っているのだが、母親の姿はなく、キッチンからは温度がまったく感じられなかった。そういえば、昨日朝から用があると言っていたのを一樹は思い出した。

しかたなく一樹は自分で朝食を作る為、テーブルの上に置いてあった、食パンを焼き、冷蔵庫の中から、イチゴジャムと牛乳を取り出した。

「チーン」

パンの焼ける音が部屋中に響いた。

香ばしいパンの匂いが、鼻から吸い込まれ、やがて体中に広がった。

一樹は食器棚から丁度いい大きさの皿を取り出し、パンをそこに乗せた。

時計を見ると、すでに8時を回っていた。

一樹は急いで食パンにジャムを塗り嚙りつき、牛乳をゴキユゴキユと飲み干す。

5分ほどで朝食を食べ終わると、流し台に食器を置き、バタバタと玄関に向かい、靴入れの上に置いてあった鍵を手に取り、家のドアに鍵を掛けると、そそくさと家を後にした。

学校へは、8時半までに着かなければ、遅刻してしまう。

歩いて30分以上はかかる、しかし一樹は、走れば間に合うと思った。

家を出ると、広大な住宅街が広がっている。

一樹は曲がり角を右に左に猛スピードで駆け抜ける。

ここまで10分くらいは経っただろうか。

あまり運動が得意ではない一樹は、段々と息遣いが荒く脇腹も痛み出してきた。 やつとの思いで住宅街を抜けると、次は200メートルくらいのグニヤリと曲がりくねった商店街がある。

そこを抜けると学校はもう目と鼻の先だ。

一樹は体いっぱい足に力を注ぎ混んだ。ダッダッダと足音が騒ぎ立てる。

「うん？」

一樹は突如足を止める…

一樹は体を一周させ、辺りを見回すと、目を疑った。

商店街中、見渡す限り人が一人もなく、何とも言えない静けさだった。

商店街の店は開いているが、誰一人として歩いている者がいない。「誰かいますかー？」

一樹は少し大きめの声で、声をあげるが、返事をする気配はまったくない。

気味が悪いと一樹は思ったが、再び足を動かし学校へと向かった。そういえば、今朝起きてから、一樹は誰一人とも会っていないかった。

そう思っている内に、商店街を抜け、学校が見えてきた。

学校の門もくぐり、校庭を見渡すと、やはり誰もいなかった。

そして一樹は確信した。

「ここが夢の中の世界か…」

そう。一樹が夢の中で望んだ世界、それは一樹以外誰もいない世界だった。

そして一樹は学校の中へと入って行った。下駄箱に靴を入れ、上履きに履き変えた一樹は、まず、いつもの様に階段で3階まで上がり、自分のクラスの教室へと向かった。

教室に入ると、さっきまでクラスメイト達が騒いでたような様子で、暖房が効いていて温かく、たくさんの机の横にはカバンが掛けてあり、体中から熱が伝わってくる。

教室の中で一樹は、独り自分の席に座り、回りを見渡し、普段の教室の様子と照らし合わせてみた。

すると自然と寂しさが湧いてきて、一樹はすぐに席を立って、教室内から出て行ってしまった。

教室を出た一樹は、元来た方へと戻り、階段で一瞬立ち止まると、更に上へと階段を昇り、最上階の屋上にたどり着いた。

屋上の扉を開けると、ビューンと冷たい風が一樹を通り抜けた。

屋上に出た一樹は、そのまま屋上の端の手すりまで行き、手すりから身を乗りだすと、町並みを眺めながら、数分の間独りたそがれていた。普段自分が過ごしている町並み、その今見ている物は実際の町並みとは多少異なるかもしれないが、そんな事はお構いなしに一樹は真剣な眼差しで町並みを見つめていた。

「あつ！」

一樹は何か思いついたのか、声を発すると、屋上から出て、階段をダンダンと1番下まで降り、さつさと靴に履き替え、学校を後にした。

学校を出た一樹は、さっき通った商店街をキョロキョロと店の中を覗き込みながら歩いていた。

ここの商店街は特別店が多い訳ではなく、特に特徴があるとは言えない普通の商店街なのだが、一樹の通う学校が近い事もあって、夕方の商店街は学生達でいっぱいになり、それは結構な利益になっているだろうと一樹は最近思っていた。

「よし、とりあえず少しお腹も空いた事だし、朝飯の続きとするか」



一樹はそう言うと、すぐ目の前にある、おにぎり屋に決め、店の横のドアを開けると、店の内側のレジの前に立った。「いらっしゃいませ」

一樹はおにぎり屋のおばちゃんのマネをすると、ニンマリと笑みを浮かべた。

「さてと、まずは何の味食べようかな」

そう言うと一樹は、まず自分の1番好きな梅干しのおにぎりを手に取り、口に運んだ。

「うーん、何か家のおにぎりと似た味だな」

一樹は何やら不満そうに、おにぎりを一気に頬張る。

いつも学校帰りのおにぎり屋は、一樹の通う学校の生徒達に人気で、一樹は今日やっとこのおにぎり屋のおにぎりを食べれたのだが、自分が想像したほどウマイと思えなかった。

「まあ、こんなもんか」

おにぎり屋でおにぎりを食べ終わると、一樹は次から次へと商店街中の店で好き放題していた。

「はあ…飽きたなあ」

店の外に出た一樹は、ふと空を見上げると、いつの間にか外は太陽が茜色に染まり、時刻は5時を指していた。

「ふう、家に帰るか…」

そう言うと、一樹は夕日を背にトボトボと商店街を後にした。

家に着く頃にはすでに日は沈んでおり、空には月がうつすらと浮かび上がっていた。家へと着いた一樹は、電気も点けずに2階の自分の部屋へと向かった。

部屋に入ると、一樹はそのままベッドに寝転び、大の字になった。

「はあ…」

「なんかつままないなあ…」

一樹はそうつぶやくと、一瞬にして目の前のモノが消え、真っ暗になった。

「この辺で終わりだな」

真つ暗闇の中でど太い声が響き渡った。

「どうだ？お前の作った夢の世界は？」

「面白く無かったし…孤独を味わったよ…」

「なんか早く普段の生活に戻りたいよ」

「力カ力、失敗したみたいだな」「ああ、やっぱ人は独りじゃ生きられないんだね、おれはたった1日でしんどかったよ」

「そうか。人間は不便な生き物だな」

「それはそうと、この後どうするんだ？まだ時間があるから、また新しい夢の世界でも作るか？」

「いやいや、もういいよ！早く元の世界に返してくれ！」

「わかった、じゃあまたな」

「もし次に会う時は違う夢の世界を考えとくよ」

一樹はそう言つと、静かに目をつぶった。

…夢の世界を作りたいと考えてるあなた。  
すぐにあなたの所に行く用意はしています。  
でも別に怖がる事はないですよ。

夢がどう転ぶかはあなた次第です。

by 夢界王  
むかいおう

（後書き）

夢とはなにか……。夢とは自分が望んでいるが、叶わない……。そういったモノが夢として現れる。僕はそう思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0981a/>

---

夢創作

2011年1月15日14時58分発行